

支那に於ける佛寺造立の起原に就いて

大谷 勝 眞

一

支那に佛教が傳來したる年代に關して的確なる事蹟を知ることの困難なると同様支那に於ける佛寺造立の起原に就きて、その年代を的確なる史實によりて指示することは極めて困難なることゝいはねばならぬ。尤も在來信ぜられ來つた如く、後漢の明帝永平年間、帝が靈夢によりて遣使求法を企て、これによりて經像初めて支那に傳來し、迦葉摩騰竺法蘭の二沙門を請來し、これを洛陽西雍門外に置いて白馬寺を建立したといふ傳説が、確實なる史實として肯定せらるゝならば、何等の疑問をも挾むことは出來ない筈である。然るに、此の明帝の靈夢による遣使求法の傳説は、今や史實として認められぬことゝなり、既にマズベロ氏も一九一一年にこのことを論じ、この傳説が漸く佛教が流行せんとした漢末に、牟子の著はした理惑論より出で、明帝通塞の事實が武帝の時の張騫鑿孔の事蹟と似たるより、後世附會せる傳説となしたるが、當時自分は本誌に於てこれを紹介し、所説を一言してゐいたことがある。又白鳥博士も夙くその傳説の虚構なるべきを説かれたが、最近常盤學士も四十

支那に於ける佛寺造立の起原に就いて

第十一卷

六九

第二章經成立の年代に關係してこの傳説に言及し、同様に後世附會の説たることを認められた。依りて從來信ぜられた此の説が史實と誤りて附會せられたる妄説でありとすれば、白馬寺造立のことも亦史實と認めることを得ぬから、直にこれを以て支那の佛寺造立の起原とすることを得ぬは言を俟たぬ所である。然らば何時頃佛敎は支那に傳來したか、又佛寺の造立は何代に始まりしやに就いて考察するの要があると信ずる。茲には佛敎傳來の年代に關しては暫く措き、佛寺造立の起原に就いてのみ卑見を述べたいと思ふのである。佛寺は言ふまでもなく、佛を奉ずるものが止住して禮拜行道をなす建物を云ふものであるが、その造立につきて述ぶるに當り、先づ佛寺の如何なるものなるかにつきて一言して置きたい。

佛寺といふ言葉はもとより古い語ではなく、古代の記録には寺塔又は塔寺とあるを普通とし、概して單に寺と呼ぶこととなつてゐる。後漢書三國志あたりの記す所によれば、浮屠又は浮圖の祠とし、浮屠之仁祠の稱がある。浮屠又は浮圖はいふまでもなく後に佛陀若くは佛とよばれたものゝ同音の異稱で、轉じて塔又は佛寺を指す名稱ともなつてゐる。即ち佛を祀り行道禮拜する建物をも稱する名となつてゐる。然るにかゝる建物をば後世單に寺と名づけ、自馬寺建初寺等のやうに公稱として用ゐられるに至つたのは何故であるかに就いては頗る疑問とせられてゐるやうである。本來佛を祀る所としての性質上より見れば、浮屠の祠とよばれた如く祠と稱して差支へはないのであるが、この點よりすれば寺は祠の

普通によりて同様に用ゐられたものと考へられぬこともない。然し所謂寺と後世より總稱せらるゝものは神祠祖廟を意味する祠堂の如きものばかりではないから、寺は祠の轉用せられたものとは見ることは難いのである。又漢代浮屠の祠とよばれたものには常に黄老が伴つてゐて、且つ別に格段なる一廓をなしたものではなかつたやうに考へられる。次に寺と稱する名稱が時と關係あるやうにも考へられぬでもないが、祠は説文に説くごとく「天地五帝所基址」で、漢書郊祀志の注にも見ゆる如く決して建造物をさすものではなくして、上帝を祭る場所をいふもので、寺の本來の意味と關係こそあれ、後世の所謂佛寺と名づけたものとは何の關係もないものと信ずる。所謂佛寺といはるゝものは、祠堂に當たるべき佛殿或は塔を具備し、行道奉仕する佛徒沙門の止住する建物を指すもので、印度にて僧伽藍摩(Sangharama)と稱するものに當たるのであるから、この意味より後には佛寺を精舍とも道場とも名づけ、淨住舎法同舎出世間舎等の異名が用ゐられてゐる。尤も佛寺には必しも佛殿僧堂を具備したもののばかりではなかつたらしく、時には單に佛殿若くは佛塔のみを主とした建物を寺と呼び、或は僧堂を主としたものを指したことのあつたのは勿論である。

然らば何故にかゝる建物に對して寺なる名稱を專用するに至つたであらうか、即ち寺はもと官衙の名稱でそれ以外には寺と稱したものはなかつたやうである。説文には寺は廷也とし有法度者也と説かれ、その性質の上から公廷公司なりとしてある。然るに釋名には寺を解して嗣也とし、事を治むるものその内に相ひ相續し、もと公司の名であつたけれども

西僧初めて支那に來るや權りに公司に止まり、後移つて別居に住するを例としたため、その本を忘れず寺號を標したと解釋されてゐる。少し時代は下るが宋の贊寧の僧史略にはこの公司を鴻臚寺と解し、鴻臚寺はもと四夷遠國を禮する邸舎であつたから、明帝の時に來た二沙門が道士と角力して勝つたために、帝は此を鴻臚寺に延いて禮し、西雍門外に一精舎を擇び、白馬馱經の事蹟により白馬寺と稱せしめたとの傳説を論據とし、寺といふ名はこれに起つたと解してゐる。贊寧の此の説はもとより論據とはすることの出來ぬは勿論であるが如何に公廷公司なればとて、又如何にその本を忘れざらんがためとは云へ、官衙の公稱を以て私に之を襲用することは如何であらうか。尤も西來の僧徒が一時鴻臚寺に止まつたことは事實であらう、またこれが緣故となつて寺號を標したとするのも決して誤つた解釋とは云はれないけれども、尙ほ他に何等かの理由がなくてはならぬと考へられる。佛敎典籍上に傳へられる所を正史と併せて考ふるに、その初期に於て寺號を用ゐたものは決して洛陽のみではない。寧ろ江東江左の地に多かつたやうであることは、此の説明を以て満足することの出來ぬ一つの理由である。三國の魏の世に官精舎が建てられ、東晉の初に敦煌より來た曇摩密多が涼州の公府舊寺に住したと傳へられるが、此の精舎は寺と同意味に用ゐられてゐるけれども、公府舊寺といふ名稱はもとより佛寺として標稱せられた名稱とは考へられないのである。即ち本來の公共官府の建物にたいする名稱を襲いだものと考へられる。又洛陽伽藍記には官寺といふ名稱を多く擧げ、高僧傳中にも屢々記るゝ所で、

然らずとも、大小方角によりて名としたものが多い。依りて考ふるに、寺といふ名稱はもど格段な官公府に對する特種なる名稱として用ゐられてゐたものが、主として西域より來れる者を取り扱へる鴻臚寺もその一であつた關係より、僧徒止住の所となり、若くは佛教も外教であつたが爲めに鴻臚寺の所管する所であつたことが、やがて寺號を標稱しこれを襲用することゝなつたものではあるまいか。漢の歷代中初めて佛教を尊崇したるは桓帝に初まることは、已に後漢書にも明文のあることであり、三國の初め已に官寺の名稱も見ゆることであるから、恐らく漢末已にかゝるものが洛陽に存在したと想像することが出来る。白馬負經の傳説もおそらく此の間に成立して、白馬寺の名もこれより附會せられたものと考へられるのである。要するに寺號を用ゐたその源は鴻臚寺にあることは事實であらふけれども、三國混亂の間に洛陽官寺の制に倣ひて寺號を標稱し、外教の建物たることを標榜したものと解するを穩當と信するのである。即ちその大小位置により或は地名を以て寺號に冠したことはその一證となすに足るものと云ふべきである。尤も嘉號を以て名付けたものは佛教編年史の内に初期に於て見られるものがあるが、此れ等は後世の呼稱を以て記るされたものに過ぎない。

二

支那に於ける佛寺造立の事實を檢するに、普通佛教編年史類に記るされたるものには多

く後漢明帝の時に白馬寺の建てられたるを最初としてゐる。歴代三寶記佛祖統記佛祖通載等即ちそれである。これらは後漢書・高僧傳・魏書・梁書・伽藍記・理惑論その他のものによりて得たものであるが、この白馬寺建立のことは、已に前に述べたごとく、明帝靈夢遣使の傳説と關係して記されたことで、已に靈夢遣使の傳説が附會の説である以上、信ずべき記事でないことは勿論なれども、常盤學士の所説と少しく意見を異にしたる所なきしもあらざる故、後に少しく卑見を述べたいと思ふ。次いで古きは、後漢の靈帝の時安世高が豫章に寺塔を建てたことである。佛祖統記には建寧三年となつてゐるが、高僧傳には年代はなく、只東寺とあるのみで、その何地なるをも示してゐない。その由來は鄴亭湖の神はもと安世高と同學で、後に湖神となつてより能く風を分ちて舟行するものに便益を興へてゐたけれども、瞋怒の爲めに鱗身となれるを苦み、安世高が南遊の途、鄴亭湖を過ぎたのを機として、これに塔をたて、善處に生るゝやう祈らんことを請ふた、依りて安世高は豫章に行つた後、その廟物を以て東寺を造立したといふのである。元來安世高の傳には疑ふべきもの多く、その造寺の年代も統紀に云ふごとく確實なるものがない。荊州記には、鄴亭湖廟神を度し、その財物を得て寺塔を立てた安世高は晋初のものとし、その地を荊城東南隅の白馬寺としてゐる。又同別傳には、同じ安世高を晋太康末安侯道人としてゐる。この間には何等かの誤傳謬錯があるやうである、従つて直に安世高の造立寺塔の事蹟を靈帝の建寧三年とのみすることは出来ぬのであるが、荊城の白馬寺は恐らく晋初のものであらふ、また東寺といふも常盤學士

の所論の如く白馬寺と同一のものであるかもしれぬ、果して然りとせば最古のものとはいふを得ぬこととなる。このことに就いては洛陽の白馬寺と共に後に述べることにする。次に歴代三寶記によれば、靈帝の光和三年に帝が洛陽の佛塔寺中に於て齋を設け、懸繒燒香し散華燃燈したといふ記事である。これ亦た何に依りしか不明なるも、佛塔寺といふはおそらく浮圖寺の改められたのであらふ、はたして左様とすれば已に前にもいふたごとく官有の建物で、西僧等を住せしめてゐた所謂官寺の如きものを指すものではあるまいか。何れにするも確たる證據を得ることは出来ないのである。

次には、獻帝の初平四年に、下邳の相笮融が佛寺を廣陵に造立し、黄金塗像を置いたことである。統紀には興平二年となり、事實と認められる年代よりも三年後のことになつてゐる。同じ統紀に、吳主孫權が魏の黃初元年に武昌に昌樂寺を造り、後九年、魏の太和三年即ち吳の黃龍元年に孫權の潘夫人が武昌に慧寶寺を建てたとする記事がある。これらの寺名は勿論後世のもので、最初はかゝる名を有つてゐたともあほもはれぬ。然し造立は事實であるかもしれぬ、何故なれば、北方に來てゐた西域僧徒等は漢末の亂に多く難を避けて江南に來てゐたと思はれる點多く、有名な支謙はたしかにその一人であつたからである。又魏の正始三年即ち吳の赤烏五年には、吳の尙書令闕澤が四明に德潤寺を立てたことが知られてゐる。その後五年、赤烏十年に康僧會が建業に來り、舍利感得の奇瑞によりて孫權を説化し、初めて建初寺を立てたといはれてゐることである。但し、佛祖統紀にはこれを赤烏四年としてゐる。

る、廣明集因縁記法苑珠林は皆この説である。かくの如く、吳の領域内には夙くより佛寺の造立があつたものらしく、宋の志磐も述せる如く、三國時代は互に戦守に務め、佛教未だ能く行はれてゐなかつたにもかゝはらず、吳の君臣の間にのみ佛寺の造立が行はれたのも、その領域内には、早くより佛教が一部の間に知られてゐたためではあるまいか。吳の領域は江の南北に互り、後漢の明帝の弟楚王英の所領もまたその領内に當つてゐる。楚王は支那の記録に現はれた最古の崇佛家であつて、少時より游俠を好み、賓客と交通した間に、佛教を知るに至つたものゝ如く、その崇佛尊信の風はその領内にも影響を及ぼさなかつたとは云はれぬ。尙ほまた漢末の亂にはその難を避けて江南に來てゐた支謙の如きは、黃武より建興の間に江南に於て多くの譯經をなしてゐる程である。初期の造寺の多くが楊子江流域に多かりしは、おそらくこれによるところ尠なくなかつたと考へることは否むことは出來ぬ。

三

支那佛寺造立の最古のものど認められるものは以上の如くであるが、然らば何れが最古のものとして、年代の的確を期し得べきやといふことにつきて少しく述べて見たい。最初に白馬寺について述べておく必要があらふと思ふ。

白馬寺が最古の造寺ではないことは已に述べた如くであるが、然らば何の代に造立せられたものであるかといふことは頗る疑問としなければならぬ。洛陽伽藍記には、

白馬寺、漢明帝所立也、佛入中國之始、寺在西雍門外三里御道南、……時白馬負經而來、因以爲名、明帝崩起祇洹於陵上、自此以後百姓冢上或作浮圖焉、寺上經函至今猶存、常燒香供養之、經函時放光明、……浮圖前奈林蒲萄異於餘處、牧葉繁衍、子實甚大、奈林實重七斤、蒲萄實偉於菓、味並殊美、冠於中京、云々。

とあり、如何にもその古きことを示すやうである。その造立の古きことはおそらく確かであらふ、又西來僧徒の止住してゐたこともこれによつて窺ひ知られると共に、また白馬寺の名が東魏の世に已に存してゐたことをも認められるのである。

水經注には左の如くいふてゐる。

（穀水南出逕西陽門、舊漢氏之西明門亦曰雍門矣、舊門在南、太和中以故門邪出故、徒是門東對東陽、穀水又南逕白馬寺東、昔漢明帝夢見大人金色頂佩白光、……于是發使天竺、寫致經像、始以楡櫺盛經、白馬負圖表之中夏、故以白馬爲寺名、此楡櫺後移在城內。

これによれば、白馬負圖表之中夏として負經とは云ふてゐない。然し白馬がその名の原となつたことは同様であつて、魏の末にこの名を冠せられた白馬寺の存じたことを知ることが出来る。然し、化胡經、漢後書、後漢紀には、明帝の時に白馬寺造立のことは勿論、造立のことすら記してゐない。高僧傳には、明帝の時に二沙門が來てこれを城西門外に精舍を立て、處らしめたといふのみで、後之「騰所住處今雒陽城西雍門外白馬寺是也」と記してあるから、もとより漢代に白馬寺のあつたことを認めてゐないのである。故に、白馬寺なる名稱は後

世に至つて與へたる名であることを明かに知ることが出来ると思ふ。四十二章經序には、起立塔寺の記事あるも、少しも白馬寺のことを説いてゐぬ。而して經序の文勢より考ふるに、經序は正に化胡經と並立すべきもので、化胡經所載の記事より出たものでなくして、別に存した所傳が、一は化胡經に、一は經序に取り入れられたものと認むべきではなからふか。

この點はマスペロ氏の説及び常盤學士の所説と意見を異にする點である。白馬寺造立のことを説くに至つたのは、むしろ水經注、冥祥記、若くは伽藍記より出でたものではあるまいかと思はれるのである。劉宋の義慶撰である世説に引かれた牟子の内にも、この事を傳へてゐないから、劉宋以後と認められぬでもない。然し、白馬寺の存じたことは已に晉初に確證がある。法苑珠林第四十二感應錄に關公則の傳が載せてある、これによれば、

晉關公則趙人也、恬放肅然、唯勤法事、晉武帝死于雒陽、道俗同志爲設會於白馬中。

とあるが即ちそれである。故に白馬寺は已に晉武帝以前に存在してゐたことが知られる。仍て思ふに、迦葉摩騰等が處住の地と傳へられた處に、三國時代に已に寺塔が造立せられて居たもので、晉初にはこれに白馬寺の名さへ與へられてゐたものとする事が出来る。而してこの時代、白馬負經若くは、白馬負圖との傳説も構成せられてゐたのであらう。但し、これ以前には白馬寺の存在を確むる材料を有たぬが、伽藍記の記載の様子から推して、已に漢末には少なくとも存してゐたやうである。

然らば白馬の名稱は、果して白馬負經若くは白馬負圖を唯一の起原としてゐるものであ

らふか、高僧傳の迦葉摩騰傳の終に白馬寺名を縁起を説いてある。

相傳云、外國王嘗毀破諸寺、唯招提寺未及毀壞、夜有一白馬繞塔悲鳴、即以啓王、王即停壞諸寺、因改招提、以爲白馬、故諸寺立名、多取則焉。

これは如何なる史實を傳へたものかは不明である、また洛陽の白馬寺がもと招提寺と名づけたものとも解せられる。法苑珠林第三十九感應錄には、同様の事蹟を晋の太康二年、中宗元帝が建康中黃里に建てた白馬寺の所に説明せられてゐる。これには、

昔外國王欲滅佛法、宣令四遠、毀壞塔寺、次招提寺、忽有一白馬從西方來、繞塔悲鳴、騰躍空中、或復下地、一日一夜鳴勢不絕、以事白王、王潛下淚、深自愧責、即勅普停、已毀之塔並更修復、由此白馬太法更興、因改招提爲白馬、此寺之號亦取是名焉。

どあり、西方より來れる白馬の悲鳴が縁となりて諸塔寺の毀破は免がれ、佛法興隆の因をなし、由りてその恩を紀念して白馬を以て寺名を標することゝなつてゐる。即ち古來白馬寺名の起原には二説あつたといふことが出来る、白馬負經して大法傳來すとなすものと、白馬悲鳴して佛法更に興隆すといふものとである。然るに常盤學士は白馬負經の事實のなき以上、他の理由によりてその名の起原を説かんとし、菩薩の出家踰城の際に乘用した白馬機陟の事實をとり來りて、白馬の恩を思ひこの名を與へたものと解されてゐる。もし果してこれを眞なりとせば、何故にかゝる顯著なる事實を以て、白馬寺名の縁起を説かなかつたであらふか、これ頗る疑問とせねばならぬ。佛教の起原として白馬の恩を紀念せんには、何

人も取つて以てこれを冠することゝを憚らぬであらふ。然るにさはせずして、却つて白馬負經、白馬負圖、又は白馬悲鳴を以て寺號を標徴せんとしたのは、果して何故であらふか、他に何等かの理由がなくてはならぬ筈である。已に化胡經が明帝の遣使傳説を記した最古のものであるならば、當時の社會には道教思想の著しく流行してゐた時であり、五行思想もひろく行はれてゐる際である。ことに白馬悲鳴の所傳には西方より來るとする説がある以上、五行老莊の思想の存することを認めねばならぬ。即ち自分は西來の佛敎を白馬を以て表はし、老子青牛の説に對したものと考へるのである。白馬負經といひ、白馬悲鳴と傳ふるも、畢竟はこの思想より脱化せるものと思はれる。即ち老子青牛に乗りて西關を出づると同様、西來の敎としての浮圖經が、白馬を以て運ばれたと考へたるにはあらざるか。この事は已に數年前に東洋史談話會席上にて言及しておいたと記憶する。要するに、洛陽の白馬寺は、已に漢末にその寺跡を存してゐたものであらふけれども、この名を以て呼ばれるに至つたのは、少なくとも三國の末頃からのことであらふと信ずるのである。

(註)洛陽白馬寺が晋初にその名を存したことは竺法護譯の覽逆經記後記及び文殊師利淨律經記後記に太康十年に法護が梵書を執りて口宣し、森道眞筆受し、洛陽城西の白馬寺にて始めて出すことが記されてある。又須眞天子經記には天竺曇摩羅察(法護が太始二年十一月に長安青門内白馬寺中にて口授せるを記してある、この二白馬寺は自ら別物であると信ずる、法護が寺を立てたのは長安青門外で白馬寺とは別處である。正法華經後太康十年の翌年永熙元年康那律が洛陽で此の經本を寫し、白馬寺にて法護に對してゐる、法護は洛陽にも來たものと信ず

るのである。その年代は太康八年より永熙元年に至る四年間である。なほ同經後記に東牛寺なる寺名を見るのは白馬寺名の起原と關係あるものとして注意に値ひするものである。

四

次に安世高の造寺について考へて見たい。

安世高の造寺のことは己に略前述しておいた、但し高僧傳によれば彼は荆城には達してゐないのである。即ち靈帝の末、關雒擾亂のため、安世高はその難を避けて錫を江南に振つた、曰はく我まさに廬山を過ぎて昔の同學を度せんと、行きて鄴亭湖廟に達した、この廟神は實に世高の同學の化したもので、瞋怒多きが爲めに鱗身を受けてゐた、世高乃ち絹物を取り、これに廟物絹雜寶を取りて塔を立て善處に生れしめんことを願ふた、世高乃ち絹物を取りて豫章に達し、こゝにその廟物を以て東寺を造るとあるものである。これを統紀には建寧三年(一七〇年)のこととしてゐる。然るに別傳には同じ事實を晋太晋末安侯道人なるものに歸し、桑垣又倉で經を出し竟り、一函を寺に残して去り、吳の末に揚州に行き、奴福善を購ひ、これと連れて豫章に至り、鄴亭湖を過ぎて廟神を度し、爲めに寺を立て、間もなく福善に殺されたのである。更に庾仲雍の荊州記には、晋初沙門安世高が鄴亭湖廟神を度し、財寶を得て荆城の東南隅に白馬寺と立つとしてゐる。この兩者は造寺の場所を異にするも、時代と事蹟とは略同じて、これを建寧三争に比すれば正に百二十年の差がある、なほ曇宗塔

寺記には安世高を晋哀帝の世としてゐるから、更に七十餘年の差を増すことゝなる。但し塔寺記の年代は瓦官寺造立のことを表はしたもので、後沙門安世高あり鄴亭湖廟物を以てそれを治むとあるも、前後の意味通せず、何等かの脱漏錯誤あるらしく、取りて論據となすには値せぬ。とにかく安世高の傳に甚しき荒唐無稽の説あるのみならず、年代にも異説あるものとしなければならぬ。安世高は高僧傳によれば安侯とよばれたといへば、晋初に安侯道人なるものと混同したるものなるかも知るべからず、或は安侯道人と同一なるを、道安が經錄編纂の時に誤まつて漢桓靈の間の人としたものであるかも知れぬ。試みに安世高所譯の經を經錄より摘出して考察するに、道安經錄に二十年間に彼が譯出した經は三十餘部に及び、出三藏記集には三十四部を出してゐるが、世高譯と確認せらるゝものは二部に止まり、五部は世高撰擬せられたもの、十六部は梁代世高譯と信ぜられたもので、他の四部は他人の譯經を世高譯とし、十部は阿舍の抄譯で、以上の内十五部は已に湮滅して現存してゐない。後世尙ほ世高譯とせられたものが三十五部に達してゐるが、その大半は梁代失譯とせられてゐたもので、他人の所譯を彼に附會したものが四部まである。即ちその譯經の事實も甚だ疑ふべきものがあるといふてよいのである。とにかく高僧傳が安世高を漢桓帝より靈帝の間の人として記載したのは、道安の經錄に従つたものであるが、已にその當時にも別傳があつて、これを晋初の人としてゐたのである。思ふに、安世高なるものが漢末に西來の僧徒として在つたかもしれぬ、それが晋初の安侯道人又は安世高といはれたものと混同

せられ、後者の事蹟が前者のうちに混入せられたものではあるまいか、これに就いてはその名に疑ふべき點がないではないのである。

安世高は傳によれば安清を本名とし、安息國正后の太子であつた、早くより外國典籍に通じてその名著はれ、遂に王位を棄て、叔と共に出家修道し佛學を究め諸國を遍歴して支那に來たのは漢桓帝の初であつた。彼が安姓を冒してゐる爲めに、康僧會が康居の人であり、支謙、支亮、支謙が月支の人であり、竺佛朔が天竺の人であるごとく、彼も亦安息國の人として考へられてゐた、即ち安姓は安息の略名とするのである。一體外國名に對して略稱を用ふる習慣は、南北朝時代の風で、少なくとも東晋以後の傾向である。故に北史に至つて、安、康、石、火などの西域諸國名が現はれて來てゐる。多くの西來僧徒がその本國の略稱を姓として呼ばれてゐることは、たしかにこれと關係あるもので、東晋初期の風ではなからふかと思はれるのである。尤も夙くよりその風がながつたとはいはれぬけれども、安息の場合には特に後より追稱したものはあるまいか。安息、即ちバルチャは、漢桓帝の時には尙ほ嚴存し、その滅びたのは漢の滅びると間もなき二二六年のことであつた。もとより安息には佛敎の行はれた形迹は全々ない、バルチャ王子が位を棄て、遁れ來ることも確證がない、或はこの言ふ安息は後にいふ安國である安息の領地の一國であつたかも知れぬ、それ以外に漢末に安息なる地方は西域にはない筈である。思ふに、この安姓のもとをなした安息は所謂安國を指すものではなからふか、康僧會の康姓の場合も同様のことが云ひ得るのである。果

して然りとせば、安息より來れりとする安姓を有するものは、三國時代にあるか、若くは東晋頭よりの追稱と思はれる、三國時代に來た康僧會が康居のものといはれたのは、後に康國として知られる河間地の康居であることは争はれぬ事實であらふ。道安が東晋の末に、釋姓を以て沙門の姓とするに至るまでは、何れもその師とする所に從ひてその姓を用ゐ、安康支竺曇の姓を冒したことを見る時は、後よりその習慣に從ひて追稱したと考へるのが至當であるまいかと信ずるのである。安世高の造寺は所謂漢の安清ではなくして、晋初の安侯道人と謂はれた安世高の傳説が混雜して、これを漢靈時の造立としたものと考へられる。故に後に大安寺と呼ばれた豫章の東寺も、荆城東南隅の白馬寺も、おそらく晋初の造立とすべきものであらふ。

然らば晋以前には全く寺塔の造立がなかつたかといふに決してそうではない。かの洛陽の白馬寺はその名稱こそ晋初若しくは三國時代に始まるとはいへ、その寺塔そのものは已に以前より存在してゐたものに相違ない。已に述べた如く、洛陽には浮屠を祠る所若しくは西來僧徒止住の處として官有の何物か存してゐたことは想像するに難くない。然しこれらのものが、たとへその造立は漢末にあつたものにせよ、的確なる證據とするものはないけれども、數に於ては決して多くあつたものではないことは勿論である。三寶感通錄にも「魏明帝洛城中本有三寺」とし、三國の魏の世には從來よりあつた佛寺は三ヶ處のみであつたことを傳へてゐる、城外の所謂白馬寺を合すれば四寺である。三寺中の一は宮城の西に

在つて外國沙門が止住してゐた、ところが毎に幡を刹頭に繫げ、宮内を俯瞰する位置に在つたから、明帝はこれと忌み、毀除せんとしたるに、會帝は舍利の奇瑞あるに感じ、更に一寺を道東に建て、これを官佛圖精舍と名けたといふことである。官佛圖精舍の佛圖は即ち佛圖澄の佛圖と同じく、古き浮圖の異譯で、佛のことである。故に、官佛寺は即ち官寺のことを意味するものである。洛陽に存した古き佛寺は、おそらく初めはかくの如きものであつて、これを寺號を以て稱するに至つたのは、官有なるがために外ならぬ、その習慣が後に一般佛寺をあらはす名稱となつたものであらふ。かくして魏の明帝の時に造られた一寺を加へて洛城内に四ヶ寺となつたが、それより三十餘年の後、晋の世に至つて洛陽に三十二寺を數へることとなつた。これには勿論城外諸寺をも含まれてゐると想像される。然しこれらも永嘉間の擾亂に多くは破壊せられたものゝ如く、洛陽伽藍記によれば、北魏の世には寺跡多くは湮滅し、唯光實寺のみ基趾を嚴存したといふことである。同書に晋時造立の寺塔は唯四箇所あるのみで、白馬寺を除きし外は悉く北魏時代の造立であることも、おそらくこれが爲めであらふ。ともかく魏明帝時の洛城中の三寺はおそらく漢末造立の官寺のあとであるに相違なきも、造立年代及び由來を詳かにせぬのを憾みとするものである。

五

次に寺塔造立の記録中、年代の古きものは、笮融の造立寺塔である。佛祖統紀によれば下

邳 笮融とし、その造立の年代を興平二年(一九五年)としてゐる。然し笮融は既に此の年
に下邳、彭城を去つて豫章に遁れた後であるから、むしろ造立はそれ以前とせねばならぬ。

漢末靈帝の中平元年(一八四年)鉅鹿の張角起りて黃巾の賊亂をなし、天下漸く擾亂の徴あり、靈帝は中平六年を以て崩し、子辯立ちて帝位に登り、大將軍何進政を執り、袁紹の策を用ゐて宦官を誅せんとして殺されしに、何進に召されたる將軍董卓は兵を將ひて洛都に入り、袁紹を逐ひ、帝辯を廢して弟獻帝を立て、政權を恣にしたれば、關東の州郡競ひ起りて董卓を討たんとし、袁紹はその盟主であつた。こゝに於て董卓は帝を擁して長安に據り、益、兗暴を逞ふし、關東の諸雄各、割據して天下は全く亂るゝに至つた。この時丹陽の人に陶謙なるものあり、靈帝の中平六年、黃巾の亂再びあこりて青州徐州に寇したる際、擧げられて徐州の刺史となり、大に黃巾の賊を破り、城内これより晏然たりければ、他の地の擾亂なるに比し、徐州は頗る殷盛豊饒を極め、李傕等關中を亂したる際、人民難を避けて徐州に移るもの多く、陶謙の名望大に聞ゆるに至つた。間もなく董卓は王允、呂布に殺されたれど、董卓の部曲の兵怒りて亂をなし、王允を殺して關中を亂だしたれば、呂布は關東に遁れて諸雄の間に活動し、曹操は兗州に據りて河南をとり、袁術と争ひまた袁紹と對してゐた。獻帝の初平四年、曹操は袁術を討ちて之を破りたるに、陶謙がその隙に乗じて泰山、任城等の地を侵せるより、兵を遣へして徐州に侵入し、陶謙を撃ちて彭城、傳陽等の十餘城を下し、陶謙を郟に攻めしも勝つこと能はずして兵を班へした。然るに陶謙は曩に琅邪をとりて曹操の父嵩を害したれば、曹操

は靈興平元年再び陶謙を討ち琅邪東海の諸縣を略し、殺戮を恣にしたるも、會、張遼反して呂布を迎へ兗州に據りたれば、曹操急ぎ兵を班へして之を討ち陶謙はその害を免がるゝことを得た。而して笮融はこの間陶謙の部下として徐州に居たのである。笮融は陶謙と同郡の人で、陶謙が徐州の牧となるや衆數百を聚めて陶謙に據り、謙はこれをして廣陵、下邳、彭城の運糧を監せしめた。然るに笮融はその位置を利用して三郡の委輸を壟斷し、その資財を以て大に浮屠寺を起し、重樓堂閣を造り、黄金塗像を設け、衣せるに錦采を以てし、輪奐の美を整へ、浴佛毎に飲飯をそなへ、席を路に布きて、普ねく布施供養したれば、その席數十里に及び、民の來觀するもの食に就くもの萬を以て算ふるに至つた。間もなく曹操大軍を以て陶謙を討ち、徐州の地大に動搖したるを以て、笮融は男女萬口馬三千を伴ひて廣陵に走り、陶謙に逼られて秣陵に屯し、更に移つて豫章に至り、太守朱皓を殺してその城に據りしも、恰も孫策に破られて豫章に遁れ來りし劉繇と争ひ、戰敗れて山中に入り、土民に殺さるゝに至つた、その歿せるは即ち興平三年のことである。

以上は笮融造寺の前後の有様である。これを以て考ふるに、笮融が陶謙に依つたのは、靈帝の中平六年、黃巾の賊が徐州に起つた後のことでなくてはならぬ。また彼が徐州を遁がれて廣陵に走つたのは、曹操が陶謙を討つた最初の時にあると見ねばならぬ。故に彼の造寺は中平六年（一八九年）以後で、且つ初平四年（一九三年）以前にありと見るのを至當の考と思はれる。もし果して然りとせば、佛祖統記がこれを興平二年においたのは史實と一致し難い

故に、何等か年代を誤りて記されたものと解することが出来やう。而してこの造寺の場所が何地にありしやは明文なく、唯徐州とするのみで、三郡運糧を監するとばかりにては據るべき所がない。統紀には彼を下邳の相としてゐるから、彼の造寺も下邳に於てしたものであると解すべきが如くであるが、却つてこれを廣陵としてゐることは何に據りしやを詳かにすることが出来ぬ。彼が曹操侵入のために、徐州の動搖した時、男女萬口を將ひて遁がれたのは廣陵であるから、その造寺の地を廣陵とするのは如何であらふ、むしろこれを彭城とする方が至當ではあるまいか。彼が下邳の相といはれるのは、下邳が地理上より考へて三郡運糧を監するには都合よき中央に位置してゐる所から、その地に留まりしことあるがためではあるまいか。然るに南北朝の初めに當つて屢、彭城寺なる名稱が現はれてゐる、これはおそらく彭城に存せる佛寺をかく名づけたもので、別に徐州の白塔寺と稱するものも、彭城寺を指した別名であると考へられる。後秦の鳩摩羅什をたすけて譯經に従ひ、法華維摩金光明等の義疏を著はしたる僧道融は、彭城に止住して其處で卒してゐる。彭城はもと楚の國で、後漢の時徐州刺史の治は郟に在つたけれども、彭城は徐州といはれてゐることが多い。笮融の造寺の地が廣陵であるか、下邳であるか將た彭城なりしかは確たる資料のなき以上、何れとも容易に決し得ざるものであるが、宋磐がこれを廣陵としたに就いては何等か據る所がなくてはならぬが、初平四年彼が廣陵に走るまでは彭城に據てゐたものではあるまいか、果して然りとせば、彭城はその造寺の地とせねばならぬと思ふ。而して彼の造寺は

それ以前であるから、おそらく初平一二年のことであるとすることを最も穩當と考へられるのである。

なほ笮融の造寺に關する後漢書及び三國史の記事には、支那に於ける佛寺の内容を窺ひ知るべき貴重資料がある。後漢書卷六百三陶謙傳には

初同郡人笮融、聚衆數百、往依謙、謙使督廣陵、下邳、彭城、運漕、遂斷三郡委輸、大起浮屠寺、上累金盤、下爲重樓、又堂閣周圍、可容三千許人、作黃金塗像、衣以錦綵、每浴佛、輒多設飲飯、布席於路云々。

となし、三國志卷之四劉繇傳には

笮融者丹陽人、初聚衆數百、往依徐州牧陶謙、謙使督廣陵、彭城、運漕、遂縱殺坐斷三郡委輸、以自入、乃大起浮圖祠、以銅鑿九重、下爲重樓、閣道可容三千餘人、悉課讀佛經、令界內及旁郡人有好佛者、聽受道、復其他役、以招致之、由此遠近前後至者五千餘人、戶每浴佛、多設酒飯、布席於路、經數十里、民人來觀、及就食、且萬人、費以巨億計。

となすのがそれである。

これに就いて先づ考ふべきは、已に佛像が當時設けられたることである。右に示すごとく黃金塗像といひ、銅爲人黃金塗身といひ、何れもそれが所謂金銅像であつたことが知られることは最も注意すべきことであらう。この像が何によりて作られしやは不明であるが、漢末西來の僧徒によりて傳へられたるものによりて模造したものなることは論を俟たぬ。

桓帝は浮屠老子を祠るといはれたれば、已に造像の存したことは想像されるから、この時、民間にかゝる佛像の作られたるは怪むに足るまいと思ふ。衣以錦綵とあるは、文字通りに衣服の如きものを衣せたるか、又は後世の如く衣紋装具を鑄出彩畫したものかは不明であるが、錦綵は鑄出彩畫されたものであらふと思はれる。次に考ふべきは塔の存在せることである。塔については後に述べることゝするが、こゝに云ふ如き塔の存在したことは少なからず興味を惹くのである。後漢書によれば上に金盤を累ぬとせるは露盤を置いたことゝ解せられる、その下に重樓を作れるは、正に塔なるべきを思はしめる。三國志によれば、銅槃を垂るゝこと九重とするから、その重樓は九層である如くに見える、但し垂は或は金字の誤れるものにて、これを九重せりとする時は後漢書の文と同様、金盤を累重したもので、九重の相輪と解することを得るのである。思ふに九重の相輪を置いたものであらふ。大同雲崗の武州山靈巖寺第十四洞に三重塔型の彫刻がある、これによれば各層毎に檐に銅幡を垂れ五箇の九重相輪を戴いてゐることを知られる。又同東洞の彫刻にも、露盤を累ね刹頭に水瓶を戴せたる相輪があり、これに左右に幡を懸けたるものがある。これは魏の明帝が忌みて破壊せんとした宮西の寺塔が、刹頭に幡を繫ぐとするものと同様である。由りて思ふに、この塔はおそらく三重で、北魏時代彫刻に現はれたる如き塔であつたではなからうかと考へられる。何れにするもかゝる壯大なる建築物特に堂閣周圍三千餘人を容るに足る丈の佛寺の出来たことは、當時の人をして如何に驚異せしめたるかを想像するに難くない。

殊に三國志に記す如く、來れるものに課して悉く經を讀ましめ、界内は勿論、旁郡までも佛を好むものをして聽かしめ、道を受けさせたる上に、なほその他を役して招致した如き、その宣布の大規模なりしは、今に於ても驚歎するに足るものがあつたといはねばならぬ。その費用巨億に達したるは、管に來觀して食に就きしものゝ布施供養の費のみではなかつたであらふ。

佛祖統紀の編者志磐をして、笮融の造寺を記せる後に、『漢世人間建佛祠行佛事者始見之笮氏』と贊歎せしめたるは、その壯大なる佛寺造立と、その宣布の大規模なりしたため、一世を驚歎せしめ、特筆大書してこれを史乘に傳へしめたること、帝王權者の盛儀にも優さつた結果と見ねばならぬのである。而してこれによりて漢代の佛寺は多く官寺の如きものでなくば、西來僧徒止住の處のであつたものが、かくして民間にも造立せらるゝことゝなり、やがて寺なる名稱が一般に用ゐられる階梯となつたことを知るに足ることゝ信ずるものである。

六

笮融の造寺に次いで記るべきものは、吳主孫權が武昌に立てし昌樂寺及び同潘夫人が同じく武昌に立てしといふ慧寶寺である。この二寺の造立は佛祖統紀に載録せられてゐるけれども、その由來を詳かにせず、前者は魏の黃初元年(二二〇年)、後者は魏の太和三年(二二九年)となつてゐるが、この年代は疑はしい。若し果して孫權及び潘夫人の造寺のことが

ありとしても、昌樂寺又は慧寶寺の名稱は後世のものであらふ。但し武昌は昌樂寺の建てられたといふ黄初元年には尙ほ鄂と稱し、孫權の都とはなつてゐない、孫權がこれに都して武昌と命名したのは、恰も劉備が蜀に帝を稱した年で、黄初二年に當つてゐる。潘夫人は孫權に嗣げる帝亮の母にて、性質は頗る險媚容媚で、袁術の女なりし袁夫人等多くの人を讎害した女であつた、その造寺の年は已に孫權が帝位に即いて建業に都した後のことである。また昌樂慧寶の名も、初期の佛寺の名稱としては受けとれぬ名である。竺融の佛寺には何等の標徴すべき名稱がなかつたのは、むしろ當を得たもので、たとへ名あるものにしても、魏の明帝の官佛圖精舍といふが如きものであつたに相違ないのである。かゝる例は他にも多く、長安又は常安大寺、長安中寺、東寺、西寺、倉垣水南寺、滄垣水北寺、涼州公府舊寺、天水寺、許昌寺などはその存在の位置によりて呼はれたものであり、長安五級寺又は五重寺、江夏の五層寺の如きは、その塔の有様より名つたもので、長沙の太守騰舍の宅を捨て寺となしたるより、長沙寺と呼んだのが江陵に有り、高座法師の止住處たりし高座寺などは、その人によりて呼ばれたものであつた。故に寺名はもとばかりの如きもので、決して嘉名を以て呼んだものではない。かく嘉名を稱するやうになつたのは、むしろ佛寺が多くなつた結果で、主として東晋以後のことである。洛陽に晋初白馬寺に對して已に東午寺があり、太康年間(六年)に建てられた太康寺、建業の建初寺などは、むしろ異例である。南北朝時代に出來たものすら、地名又はその地の舊稱を以て名づけたものが多い。因に東晋哀帝の世に沙門慧力が立てた

丹陽の瓦官寺を、或る人は阿合の異名ではないかといはれたことがあるが、これは全く謂れなきことで、やはり長干舊里にあつた爲めに長干寺と稱した如く、その地の舊稱を以て寺號を標したものである。以上の如き有様であるから、武昌に、而かも孫權の時代に昌樂慧寶などの嘉名を立てる筈なく、たとへかゝる佛寺があつたとしても、それは後世孫權及び潘夫人に因り建てられたるもので、それを誤つてかく傳へたものではあるまいかと思はれる。故に孫權及び潘夫人の造寺の事實は信すべきものではなからふ。

然るに吳の赤烏五年に、尙書令闕澤が捨宅して寺を立て、これを德潤寺と呼んだことが佛祖統紀に載せられてゐる。その位置は四明慈谿縣で、後に普濟寺と稱したものであるといふことである。闕澤は傳によれば會稽山陰の人で、頗る博學を以て聞え、群籍を究め、歴數に通じ、赤烏五年には太子太傅となり中書を領し、諸家の説を參酌して經の註をなし、又乾象歷を著はしてゐる。その卒去せしは赤烏六年のことで、孫權大に痛惜し、爲めに食進まざること數日に及んだと傳へる程に信任を得てゐた。恰も此の頃、江南には當時佛教の碩學と尙ばれた支謙が、漢末の亂を避けて吳地に來て居たから、闕澤も或はこれと交はつてゐたるやも知れず、僧傳によれば、孫權深くその才慧を悦び拜して博士とし、東宮を輔導せしめたところから、もし果してこれを眞なりとせば、東宮の太傅となりし闕澤も、必ずやこれと交はりしは想像に難くない。由つて思ふに、かく闕澤の捨宅爲寺を眞なりとすれば、たしかに支謙の影響に外ならぬと思はれるのみならず、支謙の如き碩學が、闕澤と交の深からざるべき理は

ないから、その捨宅爲寺は事實と見て毫も差支はないと信ずる。統紀に、『時否地染大法、風仕未全』といふは確實であるが、その風化が全々なしとは云はれぬ。徳潤寺の名は闕澤の字を以て呼ばれたものであるといふことである。

さて沙門康僧會が吳地に來て、建業に建初寺を立てたのは、徳潤寺の立にられてから五年後の赤烏十年(二四七年)のことである。この年康僧會建業に來りて茅茨を營み、像を設けて道を行じたるに、吳の地沙門を見ること最初なりければ、人人これを怪しみ、有司孫權に申した、孫權即ち漢明帝神を夢みて佛としたるが彼またその遺風を傳ふるものなるべしとして、召し入れて彼に靈驗の有無を詰問した。そこで康僧會は佛世を去ること已に遠きも、遺骨舍利の神曜方なく、阿育王已に八萬四千の塔を起してゐる、塔寺の興るはその遺化を表はすものなることを答へた。孫權乃ち舍利を得たらば塔を建てることを約したるに、七日の後彼は舍利を得て靈驗を示したれば、孫權も大に歎服し、塔を建て一寺を造りて建初寺と名づけた、これ佛法最初に興るの故であるといふ。この年代については、佛祖統紀に赤烏四年としてゐる。廣弘明集には吳書を引いて、赤烏四年康僧會の建初寺造立のことを述べたる後、孫權が尙書令闕澤に就いて佛敎傳入の由來に關して問答をしてゐることを記してゐる。もしこれを事實とせば、建初寺造立は赤烏六年、闕澤の死去以前のこととなくてはならぬから、高僧傳に赤烏十年とするは何かの誤謬といはねばならぬ。高僧傳に『即爲建塔以始有佛寺故號建初寺』とあるから、徳潤寺造立以前とするを至當と思はれるのである。

七

支那の佛寺には佛殿の外に塔をその主體としてしるものがある。塔は卒堵婆塔婆の略稱で、古くは單に浮圖を以て呼ばれたこともある。元來印度には支提即ち *Stupa* と卒堵婆即ち *Stupa* の二種がある。支提は又難提脂帝制底制多とも音譯し、名義集には可供養處滅惡生善處と意譯せられてゐるものである。即ち一般に神聖なる場所として常に禮拜された處で、支提崇拜は印度古來存するものである。卒堵婆は特に骨身舍利を藏するものであるから、『有舍利名塔、無舍利名支提』と解き、阿含經には四支徵を明かして、佛生處得道處轉法輪處入滅處としてゐる。今のブダガヤ塔は菩提支提といはれたもので、所謂得道處の支提である。サルナートの塔は轉法輪支提といふてよいのである。かく卒堵婆は骨身舍利を藏するを條件としてゐるから、方墳圓塚とも譯されてゐるが、その形式の上より高顯靈廟ともいふてある。これを建つことは種の功德を説かれてはあるが、要するに佛を供養する意味で、支那に塔を立つるのは即ちこれより起つたものである。

さて支那に於て建てられた塔の造立年代の最古として傳へられてゐるものは、周穆王の世の所建とするものと、阿育王の造塔に關係をつけてゐるものと二種がある。前者には法苑珠林三十八敬塔篇にある秦州麥積崖塔の如き、『佛殿下舍利山神藏之此寺周穆王所造名曰靈安寺』とするもの、又鼓山竹林寺の『是迦葉佛時造周穆王於中更重造』といふ如き是である。

もとより穆王の時代は釋迦出世以前であるから、今日から見れば一顧だにも値せぬ妄説に過ぎぬ。後者の阿育王造立に歸せんとするものは極めて數多に登り、一々掲ぐるすら煩雜であるぐらゐで、何れも佛舍利を藏し、その舍利は阿育王が鬼神に授けて閻浮洲中全般に寶塔を立てしめ、佛教興隆の基を聞かせたものとするのである。沙苑珠林第三十七に、『今諸處塔寺多是古佛遺教基(阿育王表之、福地不可輕也)』とあるのが即ちこれを指してゐるのである。此傳説は阿育王傳及び阿育王經に傳へられ、前者は西晉の安法欽が太康年中に譯出したるを以て、所謂八萬四千の寶塔造立の傳説はこれ以後に支那に知られたものであるから、この所説は西晉以後に出來たといふてよい。今左に阿育王造塔の主なるものゝみを摘出して見やう。

- 1、 會稽鄭縣塔(西晉)
- 2、 揚都長干塔(東晉?)
- 3、 青州古城塔(後趙)
- 4、 河東蒲坂古塔(後秦)
- 5、 扶風岐山南古塔(平原上塔)
- 6、 瓜州城東古塔
- 7、 沙州城內廢大乘寺塔(阿育王本塔)
- 8、 洛州故都塔(阿育王舍利塔疑即迦葉摩騰所將來者)

9. 甘州刪丹塔(疑姑臧育王塔)

10. 益州郭下福感寺塔

同 晉源塔

同 雒縣塔(以上三相傳云是鬼神幸育王教、西山取大石爲塔基、舍利在其中故名大石也)

11. 並州大谷榆社塔

12. 高麗遼東城傍塔

13. 荊州長寧寺塔

14. 衡岳南可六百里在永州北有大川……池南有阿育王大塔

以上の外、尙多數を算するを得べし。これ全く支那も閩浮一洲中と考へ、佛教の興隆を希へる僧徒が、故意か若しくは所謂舍利の靈感によりて附會したものに過ぎない。舍利は蓋し西來僧徒の齋らし來れるもので、魏の明帝が官佛圖精舍を宮西道東に建てたのは、西域沙門が奉じてゐた舍利の奇瑞に感じた爲めであり、建業の建初寺の造立も康僧會の感得したる舍利によりて建てられたる所である。その後西來僧徒の齋らし來れる舍利、若くはそれと同様のものを得た處に、次第に造寺の事蹟が傳へらるゝに至つた。この舍利を得て建てられた塔の内、最古のものは蓋し臨海鄞縣の塔であらふ。

集神州三寶感通錄によれば、西晉太康二年に、並州の劉薩何(又劉達)が冥中の告により、雒下齊城丹陽會稽に阿育王塔あることを知り、會稽鄞縣に至つて塔を起したのが即ち鄞塔であ

る。■下の古塔につきては、同書に『白馬寺南一里許古基、俗傳阿育王舍利塔、疑是即迦葉摩騰所將來者、降邪通正故立塔表以傳真』とするもので、『降邪通正』とは、二沙門來りし後道士と角力し、神通を現じて道士等を降服せしめたることをいふものである。已に遣使傳説が假託の説でありとすれば、角力のこととはもとより信すべからざるは言ふまでもない。但し三國時代には已に此の説が構成せられてゐたものゝ如く、たとへ沙門の渡來の所傳を斥くとも、何かの古基を存じてゐたが爲めに、これに附會したる傳説であらふと思はれる。丹陽の古塔は即ち長干塔と稱せらるゝもので、『三寶感通錄』によれば、『今在潤州江寧縣故揚都朱雀門東南古越城東廢長干寺内』とあるものがそれで、『又昔西晉王統江南是稱吳國於長干舊里有古塔地即阿育王所構』とある。これ或は康僧會の得た舍利を奉じて建てられた建初寺の塔ではあるまいか、何となれば建初寺は吳が滅びてから後は全く現はれて來ぬからである。傳ふる所によれば、孫權の死後その子亮が位を嗣ぎ、五鳳三年に叔孫綝が執政となりてより、盛んに諸塔を毀壞したことがある。この時おそらく建初寺の塔も湮滅せられたが如く、吳滅びし後、僧徒等なほ故處に依りて止住し、三層塔を起した、然しこれもまた久しからずして破壊し、舊基も不明となつたと傳へられる。故に三層塔は吳の滅びし二八〇年後間もなく立てられたものであつたが、これは所謂長干塔ではない。その後同じ長干舊里に、東晉の咸安二年(三七二年)に簡文帝が三層塔を起してゐるけれども、更に冥祥記の記載に従へば、簡文帝の子孝武帝の太元の末に、並州西河沙門劉慧達が、丹陽の古塔を尋ねて越城に登り、長干異氣

あるを見てその處に至りて止住禮拜したるに、夜光明を見ること屢であつたから、その地を發掘して鐵銀金三種の函にふさめたる三舍利を得、これを基礎として更に一塔を造り、孝武帝これに三層を加へたことが感通錄に傳へられてゐる。これ即ち所謂長干塔といはれるもので、廢寺内二塔中の西邊のものを指すと傳へてゐる。但し茲にいふ太元の末とする年代は、孝武帝三層を加へた年代で、劉慧達即ち薩何が造立した年代ではないやうである。もしこれを薩何の所造の年代とすれば、鄧塔を建て、より約一百十年を経てゐるから、薩何が生存してゐるとも思はれない。太元は恐らく太康の誤りではなからふかと思はれる。齊城の古塔については、只阿育王所造舍利塔とするのみで、何等特種の所傳をも有してゐない。その他瓜州沙州涼州扶風等の古塔は、その地理の關係より、恐らく古きものではあらふけれども、年代を知る可き何等の手がかりもないのである。

然るに感通錄に載録された古塔中に坊州檀臺山上の古塔といふのがある。その位地は坊州玉華宮寺の南二十里許大高嶺を俗に檀臺山と稱し、山上に古塔があるのである。この古塔の基底甚だ宏く、その面方四十三尺、上に一層の輒塔あり、四面に戸を開き、石門高さ七尺餘、廣さ五尺餘、傍に破甃無數散亂し、古老の傳によれば、周文王の輒塔十三級を建てたと傳へられる。然るに唐の龍朔元年、大慈恩寺の沙門惠貴なるものが古迹を訪ねて塔側に古甃三十餘所を發見し、なほ熱甃の填滿せるを見たことがあり、同じく三年にこれを發掘して碑文を得た。その銘に「周保定年塔崩」とし、「置塔經四百餘年崩」の銘文を存してゐたといふこと

である。保定は正に北周武帝の代五六一一年—五六五年で、かの毀佛の盛んであつた時に相當してゐる。この塔の崩れたのは或はこれが爲めに破壊されたものではあるまいか、もし果してこの銘文の如くならば、保定五年より四百年前は正に後漢桓帝の延熹八年に相當するから、これを以て支那に於ける最古の造塔として差支へないものであらふ、これに阿育王塔の俗傳を傳へてゐないことは、却つてその造立の古きことを語るものではなからふか。尤も感通錄の著者道宣も述べてゐる如く、周文王の世に造立せらるべき筈のものではなく、その周文の何んであるかは不明なるにしても、規模の壯大なるは想像するに難くないから、凡庸者流の造立にあらざるは勿論であると共に、塔の記載の上より、この廢塔が何となくヌタイノ氏の報告せる、天山南路の和闐の東方 Nya 附近の廢塔又は Mauri-Tim Supta, Rawak Supta, Endere Supta の如き廢塔を思はしめるものがあることは注意に値ひするものと考へられる。

八

以上支那に於ける寺塔造立の起原と思はるゝものにつきての概要を述べたつもりである。從來漢明帝が白馬寺を建てたのが抑も支那佛寺造立の最初とせられてゐたけれども、その非なることは、白馬寺の名稱靈夢遣使の所傳の妄なることよりこれを否定するに躊躇しないのである。たとへ晋末洛陽 擾亂の地となつたとはいへ、魏の明帝の時に洛城中僅

かに三寺を存するのみであり、また佛教が隆興するとまでに至つてゐない時であるから、漢代に寺塔造立が盛んに行はれた筈はないのである。然るに徐州の地はもと後漢の楚の國の地であつた關係から、楚王英の感化も多かりしなるべく、漢末の亂に西來僧徒が難を南に避けたるも多かりしより、民間に於ける最初の佛寺が、下邳彭城の間に起つたことは決して偶然の結果ではないと信ずる。然し、洛陽にそれより以前佛寺のなかつたわけではなく、一は必づや存じたものであらふ。その一は後に白馬寺となつたもので、官有の建物として西來僧徒を止住せしめたる所がなくてはならぬ、おそらくこれをば當時公廷又は公司の意味より寺と稱し、それが後に慣習となり、また江南に造立せらるゝに至つてその名を襲ひ、遂に一般に佛殿、僧房塔を具へたものを寺を以て稱するに至つたものと思はれるのである。要するに官寺の例が江南僑朝に用ゐられ、これより民間に及んだことは、魏の明帝の官佛圖精舍の名稱より推定することが出来る。而して白馬寺の名稱は三國時代よりの稱呼で、侵潤せる當時の五行老莊の思想より得たものであるが如く、白馬負經の傳説はむしろこれより出たものではあるまいか。又塔の造立も漢末已にあつたであらふが、その盛んとなつたのは西僧の舍利將來と共に、阿育王經の纂譯せられてから、後その傳説を取りて以て支那に於ける佛教興隆の基とせんとした結果に外ならぬと思ふのである。